Artículos

ガウディ研究、グエイとサグラダ・ファミリア聖堂

鳥　居　徳　敏

Estudio sobre Gaudí: Eusebi Güell y la Sagrada Familia

Tokutoshi TORII

要約

カタルーニャの大富豪アウゼビ・グエイ（グエル）がガウディのパトロンであり、その未曾有の建築の誕生には不可欠の存在であったことは周知の事実であろう。それは、フィンカ・グエイやグエイ酒蔵などのほか、世界遺産のグエイ館、クローニア・グエイ教会堂、およびグエイ公園のオーナーであり、生涯にわたり建築家に作品を依頼し続けたことによろう。しかし、ガウディの代表作、未完の聖堂サグラダ・ファミリアについては、グエイとの関係は一切語られていないのである。

本稿はグエイがサグラダ・ファミリア聖堂の建設においても極めて重要な役割を演じており、この富豪の存在なくしては今日知られる聖堂は存在しえなかったことを明らかにする。これによりグエイがガウディの建築生涯すべてに関わっていたことが証明される。

Key Word　ガウディ、グエイ（グエル）、サグラダ・ファミリア聖堂

RESUMEN

Es bien sabido que D. Eusebi Güell fue mecenas de Gaudí y que este hecho resulta un requisito indispensable para que su arquitectura sea tal como la conocemos hoy en día. La razón de esto se basa en que Güell le encargó a lo largo de su vida profesional obras como el Palacio Güell, la Cripta de la Colonia Güell y el Park Güell, además de la Finca Güell, las Bodegas de Güell, etc., que con el tiempo se han convertido en bienes Patrimonio de la Humanidad. Sin embargo, nada se habla de la relación de Güell con la obra maestra de Gaudí, el Templo de la Sagrada Familia.

En este artículo intentaremos a aclarar el papel tan importante, tal vez imprescindible, que Güell desempeñó en la construcción de dicho Templo, y sin el cual, no existiría como lo conocemos en la actualidad. Asimismo, llegamos a la conclusión de que Güell patrocinó realmente a Gaudí durante toda su vida sin abstenerse ni un solo año.

Palabras claves: Gaudí, Eusebi Güell, Templo de la Sagrada Familia

はじめに

バルセロナのガウディの大作、サグラダ・ファミリア聖堂は、2026年の完成を目指し急ピッチで建設が進んでいる。しかし、つい最近までこの作品は未完の聖堂として人々の心を揺さぶり、ロマンを掻き立てるものであった。完成されないことを知りながらその聖堂に献身するガウディの姿に人々はロマンを感じてきたのである。

事実、1980年代前半まで建設は遅々として進まず、誰もが未完の聖堂として認識していた。しかし、1984年ガウディ作品が世界資産に登録され、世界的な観光ブーム、さらには1992年のバルセロナ・オリンピックを契機に当地への観光客は急増し、聖堂への訪問者数も倍増してきた。まさに最近の20年間は入場料収益による潤沢な財源が急ピッチの建設を可能にしてきたのだが、これは例外的な状況であり、それ以前はこの現況を想像できるような状態にはなった。

ガウディが聖堂建設に携わった43年（1883-1926）の間には3度の建設中断危機が存在した。第1回目（1888-89）は実際に中断し、第3回目には建設中断の決定（1914）が下されてもいた。

	1887年	1888年	1889年	1890年	1891年	1892年	1893年
1月	12,765.55	11,111.00	19,769.78	9,134.21	10,392.90	17,839.31	13,704.45
2月	9,911.40	7,071.40	10,356.24	10,380.77	6,802.56	9,152.99	14,823.66
3月	17,036.90	11,484.33	11,355.62	14,582.42	11,848.61	17,426.32	17,682.21
4月	8,614.59	8,113.11	6,957.05	9,255.70	8,962.40	10,142.80	13,656.86
5月	7,534.12	8,574.16	8,070.99	6,663.91	6,132.53	8,356.51	9,209.86
6月	6,450.46	22,542.73	8,000.57	10,682.47	5,887.16	9,083.31	9,876.71
7月	7,926.13	6,549.20	7,396.68	8,955.22	13,480.90	9,180.50	12,153.35
8月	5,893.69	5,532.93	5,736.37	5,237.79	9,577.98	7,395.50	2,942.93
9月	6,047.29	6,932.96	3,524.65	4,822.63	10,011.64	8,222.71	14,165.87
10月	6,801.02	5,671.48	5,080.34	5,980.43	6,410.04	7,502.95	10,361.93
11月	10,482.35	5,638.18	7,136.68	6,078.64	6,692.16	9,459.12	10,998.95
12月	9,628.44	11,660.66	8,392.46	7,725.18	11,158.62	12,604.11	10,328.94
年間計	109,091.94	110,882.14	101,777.43	99,499.37	107,357.50	126,366.13	139,905.72
	1894年	1895年	1896年	1897年	1898年	1899年	1900年
1月	13,274.95	12,274.60	18,016.25	20,843.81	20,919.65	7,414.18	9,263.03
2月	13,184.93	15,735.04	10,677.30	20,430.79	14,409.96	5,385.58	4,305.88
3月	13,461.20	15,828.32	12,584.43	23,600.87	7,860.97	7,898.09	7,323.99
4月	11,482.98	11,799.39	11,029.29	19,127.19	5,465.42	4,621.22	6,339.36
5月	8,479.44	10,001.75	19,446.86	22,361.38	3,501.60	8,792.10	7,653.39
6月	10,021.15	15,636.38	24,461.19	17,529.76	2,859.77	2,362.75	6,451.13
7月	11,723.44	9,446.05	26,538.21	18,619.88	4,189.56	4,529.07	4,060.57
8月	7,599.18	6,811.55	19,499.26	17,307.23	2,122.05	3,041.25	3,714.23
9月	8,677.61	13,265.76	18,403.28	18,296.30	9,574.86	1,909.29	4,015.90
10月	9,368.97	11,247.47	19,624.19	18,681.78	3,961.19	2,643.77	2,751.68
11月	9,091.44	9,116.59	19,063.14	18,500.01	5,293.25	3,528.38	4,817.42
12月	14,422.15	11,627.82	21,889.19	20,522.87	5,649.10	6,020.92	4,063.84
年間計	130,787.44	142,790.72	221,232.59	235,821.87	85,807.38	58,146.60	64,760.42

表 1 サグラダ・ファミリア聖堂への月間献金表 1887-1900、網掛月にイサベル遺産が含まれる

第2回目の時は、建設量を減らすことで赤字財政から逃れたのだが、このときはカタルーニャの大詩人ジュアン・マラガイが聖堂とガウディに決定的な影響を与えることになった[1]。ところが、第1・3回目の中断危機から聖堂を救った立役者が誰であったのかが、今日に至るまで明らかにされていない。これらの人物を突き止めることが本論のテーマである。

「降誕の正面」誕生

第1回目の建設中断後、聖堂に想像を絶する献金が寄贈される。次に紹介するエピソードはこの献金のきっかけになった言い伝えである。

ある日のこと、イサベルという名の夫人が建設中の聖堂を訪れ、自分の守護聖人に捧げた祭壇の建設費を寄進したいと申し出た。これに対しガウディは、

「建設に協力したいというあなたの気持ちは嬉しいのですが、しかしここでは、サグラダ・ファミリアを奉るという考えですべてがなされていますからね。聖イサベル（エリザベト）なら、イエスを洗礼したヨハネの母親として聖家族に関係付けることができます」、と答えると、

「いいえそうではないのです、ハンガリーの王妃イサベルなのですが・・・」、と夫人は言う。

「そういうことでしたら、あなたの申し出を受けることができません」、とこの会談は実を結ぶことがなかった[2]。

しかしながら、イサベル夫人は自分の意向を拒否されたものの、遺産を聖堂に寄進したいという遺言を残して他界した。遺言執行人弁護士アルメーダ Almeda は、ガウディというよりも、聖堂の建立母体「サン・ホセ信心会（帰依者精神的協会）」の創立者ジュゼップ・マリア・ブカベーリャ（1815-92）とその娘婿マヌエル・ダ・ダルマッサス(1843-93）と合意し、夫人の遺産を建設の進行に合わせて月々分割して寄進することにした[3]。

「信心会」の機関誌『サン・ホセ帰依の布教』（1866年創刊）は聖堂が着工された翌年の1883年より月2回の発刊となり、その15日号には毎月の聖堂への献金者名簿を掲載していた。この「月間聖堂献金表」にイサベル夫人の遺産が初めて登場するのは1891年7月、そして、米西戦争の勃発する1898年2月まで継続した（表1）。遺産総額はこの6年７ヶ月間の聖堂寄進総額の53％に当たる57万7,500ペセタであった[4]。

1882年3月、サグラダ・ファミリアは聖堂頭部の地下に相当するクリプタ（地下礼拝堂）から着工され、1888年にはその天井ヴォールトまで建設は進み、その構造躯体は完成していた。しかし、この上部構造である聖堂頭部の着工は1890年であり、その前年の1889年の工事が皆無に等しいことから、この時期の建設の中断が推測されるのである[5]。そして、この聖堂頭部外周壁が終了し、降誕のファサード（正面）が着工されるのが1893年のことであった。

後の1915年、ガウディは同正面についてこう表明する。

「献金と聖堂の将来については神意が決定を下すであろう、なぜなら、サグラダ・ファミリアではすべてが神の御意向に従っているから

---

(1) 鳥居 (2012), pp.13-18

(2) Dalmases, José María de：“Gaudí en el plan general del Templo Expiatorio de la Sagrada Familia”, *El Pro,* Vol.60, №.16(1926.8.15), pp.271-76,; Serra y Boldú, Valerio：“La Sagrada Familia–El Templo que no se acaba de construir”(*La Vanguardia,* Barcelona, 1932.3.19), *El Pro,* Vol.66, №.15(1932.8.1), pp.234-35

(3) 前註の Serra の論稿参照、および Martí Matlleu, J.：“Impresiones acerca del Templo de la Sagrada Familia - El monumento a la Cruz”, *D.deB,* №.64 (Barcelona, 1914.3.6), p.3167

(4) “Una Limosna”, *El Pro,* Vol.32, №. 11 (1898.07.01), pp.285-58; Martí Matlleu, J.：“El Templo de la Sagrada Familia - Escuela de infancia y del hogar” (*El Correo Catalán,* Barcelona, 1922.10.22), *El Pro,* Vol.57, №.2 (1923.01.15), p.24, Nota 3

(5) 拙論「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂の財政、および財政問題が同聖堂とガウディに与えた影響に関する考察」、『建築史学』第 20 号（1993 年 3 月）54-89 頁

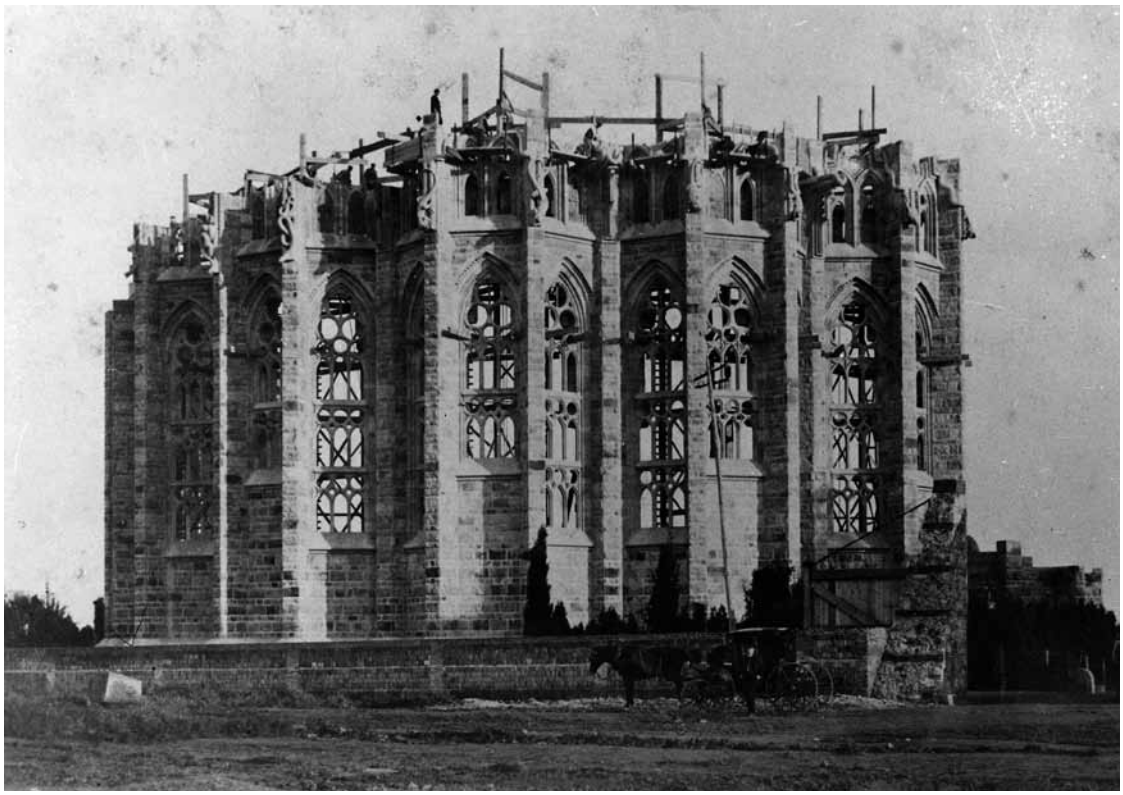

図 1 サグラダ・ファミリア聖堂、1891年末の聖堂頭部建設状況

だ。最初からそうであり、今完成しようとしている（降誕の）正面が着工されたとき、一人の御夫人が70万ペセタの寄進をした。この献金が最初に考えられていた慎ましい計画案を最上級のものにすることを可能にした。そんなわけで、この献金が存在しなかったら持ち得なかった素晴らしさを聖堂に与えることができた。それは聖堂の財政を管理するダルマッサス氏の要請のお陰であり、氏はバルセロナの新司教のカタラー卿がその献金を他の用途に使うのではないかと恐れ、できるだけ早く使うよう私に言った。しかし建設に浪費することなく、正面は素晴らしいものに仕上がった」[6]（傍点は論者による、これらの部分は論者が提起する問題箇所）

ダルマッサスは「サン・ホセ信心会」の創設者ブカベーリャの娘フランセスカ（1846-93）の夫であり、創設者に協力し聖堂財政を担った。ジャウマ・カタラー（1835-99）卿は、聖堂が着工した翌年の1883年バルセロナ司教に就任しているから、新司教というガウディ、もしくはこの会話の収録者マルティネイの記憶は思い違いである。92年から93年にかけてブカベーリャと娘婿夫婦が他界し、創設者の孫たちは未だ幼かったため、1895年この司教が第１期聖堂建設委員会を設立した[7]。またガウディの表明に従えば、降誕のファサードが着工されてから、70万ペセタの寄進が届き、「ダルマッサス氏の要請」があって、その巨額をファサードの建設に費やしたことになる。ところが、同ファサードは1893年初めに着工の準備が始められ、

6　Martinell, César: *Gaudí i la Sagrada Família, comentada per ell mateix,* Barcelona; Aymà, 1951, pp.103-4; 西語増補版、*Conversaciones con Gaudí,* Barcelona; Punto Fijo, 1969, p.65. 会話の日付、1915.11.09

7　“Decreto que publica en el «Boletín Oficial Eclesiático» correspondiente al día 14 de agosto último”, *El Pro,* Vol.29, №.17 (1895.09.01), pp. 446-52

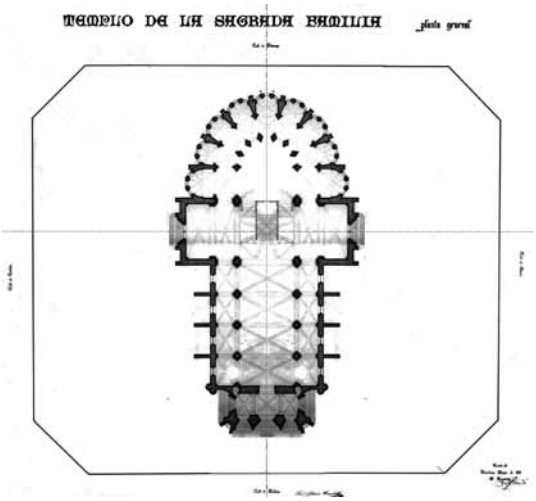

図２ サグラダ・ファミリア聖堂、初代建築家ビリャール案1882-83

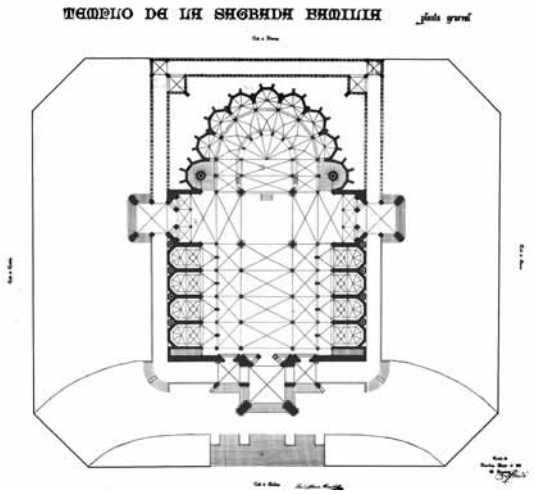

図３サグラダ・ファミリア聖堂、２代目建築家ガウディによる最初の変更案1885

同年2月8日にはダルマッサスが他界しているから、１ヶ月の間に、ファサードの建設準備、献金の到着、それをできるだけ早く費やす決定などが同時進行的に起こったことになる。しかし上記したように、70万ペセタという寄進額は何らかの事情で58万ペセタ弱まで減額されており、それが聖堂に入金されるのは1891年7月のことであった。つまり、遺産の入金が公表されてから1年半後に降誕のファサードは着工されているのだ。ここでも、ガウディ、もしくはこの巨匠の会話を収録したマルティネイの記

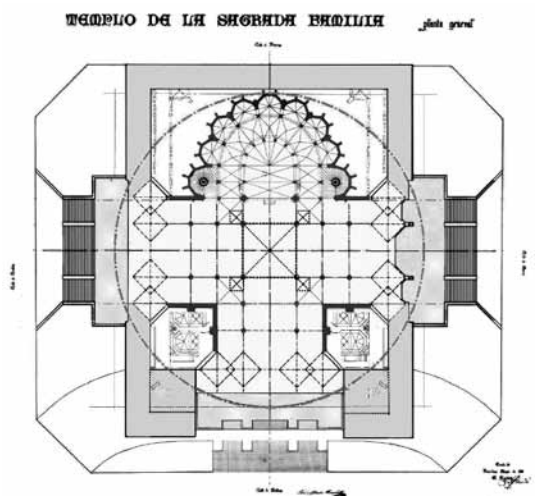

図４サグラダ・ファミリア聖堂、ガウディによる2回目の変更案推定図1893

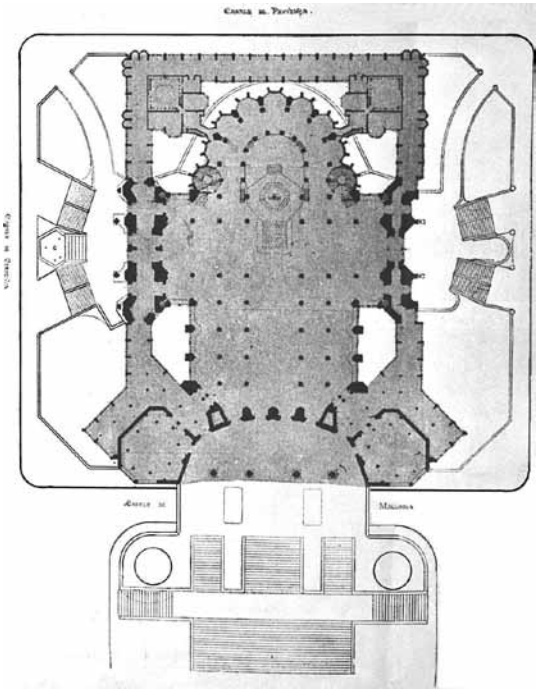

図５サグラダ・ファミリア聖堂、ガウディにより初公表された平面図1917

憶に誤りが認められる。

他方、金額70万、減額しても58万ペセタという数字は、聖堂の敷地購入費を含めたクリプタ完成までの工費総額70-75万ペセタに相当する程の巨額であった。この意味では、「この献金が最初に考えられていた慎ましい計画案を最

上級のものにすることを可能にした」というガウディの言葉には信憑性が出てこよう。事実、この献金到着後に聖堂の設計変更がなされ、現在知られる最終計画案への第一歩を踏み出す。まさしく降誕のファサードの着工は聖堂計画案の大変更を意味したのである。

図2は聖堂初代建築家ビリャールの最終案平面図（1882-83)、図3はガウディの最初の平面変更案（1885)、図4は降誕のファサード着工時での平面変更の推定図、そして図5は1917年に初公表された聖堂平面図である[(8)]。

初代建築家ビリャールの計画案に従いクリプタは着工され、その上部構造の聖堂頭部（後陣）も平面形の設計変更なく建設は継続された(図1)。したがって、ここまではガウディの語る「最初に考えられていた慎ましい計画案」に従ったことになろう。キリスト教のカトリック聖堂、すなわち教会堂の頭部（後陣）は神の象徴である光（＝日）の昇る東側を向くのが一般である。しかしながら、敷地条件がこの法則に合致しないことから、本聖堂の頭部は東側でなく、北西側を向く。それ故、この聖堂の十字形平面の足部に相当する大正面は南東（南）を向き、腕部に当たる翼廊（交差廊）の端部は北東（東）と南西（西）を向く。またカトリック聖堂の正面（ファサード）は「石のバイブル」と言われ、文盲者にも理解されるよう聖書の記述を彫像や浮彫で表現してきた。このサグラダ・ファミリアは十字形平面の頭部を除く3つの端部に聖堂への入口が設けられる3つのファサード（正面）を持ち、上記した方位から、日の昇る東側端部を降誕（誕生)、日の沈む西側端部を受難（死)、そして太陽の輝く南側の大正面を栄光のファサードと命名した。1893年に着

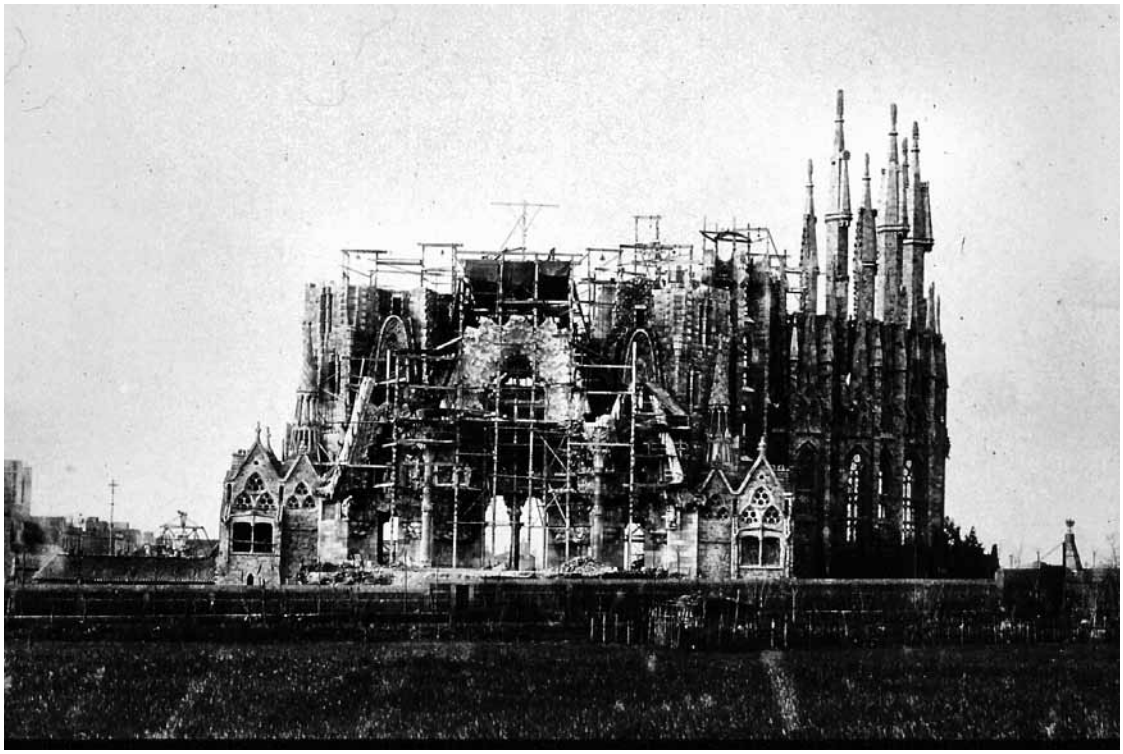

図 6 サグラダ・ファミリア聖堂、降誕の正面（1893年着工)、1898年の建設状況

(8) 拙論「ガウディ研究、サグラダ・ファミリア聖堂計画案の変遷Ⅲ―平面計画の変遷―」、『麒麟』第 22 号（2013 年 3 月）pp.42(41)-18(65)

工された降誕のファサードは翼廊の東側端部を塞ぐ正面であり、イエスの誕生と幼児期がテーマとされた。したがって、このファサードの建設は、その幅と位置が翼廊の幅と長さを決定することを意味した。

1893年時点での計画に従えば、降誕のファサードの幅は42m、位置は交差部中心から40mであり、正面前に奥行10mの広場が計画された[9]。反対側の受難のファサードも同じ距離にあるとすれば、翼廊の長さは80mとなり、その幅は扉口の位置と後の計画案から30mと推定される。これはビリャール案の翼廊17×50m、およびガウディの1885年案の14.6×55.8mに対し、約3倍の規模に拡大したことを意味する。なおかつ、「石のバイブル」としてのファサード幅も倍増していることから、イサベル夫人の献金が「慎ましい計画案を最上級のものにすることを可能にした」というガウディの言葉も理解されよう。また、この遺産による最後の献金が掲載された機関誌（1898年3月号）には、降誕の正面の「ほとんどすべての装飾デザインが決定された」[10]と記されていることからも、イサベル夫人の遺産の存在が降誕のファサードの誕生には不可欠であったと断定できる（図6）。

この「降誕の正面」の出現によりサグラダ・ファミリア聖堂の評価が決定づけられたことはマラガイの聖堂賛歌を見れば明らかであろう[11]。この意味でも、イサベル夫人の遺産がこの聖堂の将来に決定的な役割を演じたと言えるのである。

イサベル夫人の遺産

イサベル夫人の遺産は極めて重要な役割を演じ、この遺産なくして現在のサグラダ・ファミリア聖堂は考えられない。これほど重要な遺産であったにもかかわらず、このイサベル夫人が誰であったのかが不問に付せられてきた。聖堂機関紙『サン・ホセ帰依の布教』のみならず、ガウディを知る研究者プッチ・ブアーダ、マルティネイ、バルゴス、あるいはブネット・ガリなど、誰一人としてイサベル夫人を特定しようとしなかったのである。これには「何かある」、と勘繰らざるを得ない。おそらく箝口令のようなものが存在したのではないか、と思わざるを得ないのだ。

「箝口令」があったとすれば、誰ならそれが可能なのか。唯一可能な人物はアウゼビ・グエイ（1846-1918）であろう。グエイ（グエル）なくしてガウディ建築は語れないことは誰もが認める。しかし、グエイがサグラダ・ファミリア聖堂に関係している情報は皆無であり、問題にしている遺産とグエイとを結びつけることは容易ではない。

先ず、建立母体の「サン・ホセ信心会」は貧しい人々が集い、養父聖ヨセフを介して神に祈り、虐げられた境遇から一歩でも脱することを集団的に祈願する団体であり、グエイのような新興ブルジョアに相応しいものではない。また、この聖堂はこうした貧しい人々が生活費を削ってまで工面した些細なお布施を財源にして建立されたものであり、グエイのような大富豪に似つかわしいものでない。それ故、サグラダ・ファミリアの歴史でグエイとの関係が取りざたされることは一度としてなかった。

しかしながら、グエイがサグラダ・ファミリアを訪問しなかったわけではない。1892-1903年の11年間、ガウディの下で丁稚奉公したスケッチ画家のリカルト・ウピス（オピソ1880-1966）が残したスケッチには「降誕の正面」の前でガウディの説明を受けるグエイと後のビックの司教トーラス・バジャス（1846-1916）神父が描かれているから、グエイがサグラダ・ファミリアに全く無関心であったとは考え難い（図7-8）。また、忘れてならないことはグエイの妻、すなわちコミーリャス侯爵アントニオ・ロペ

(9) “Las obras del Templo Expiatorio de la Sagrada Familia”, *El Pro,* Año 28, №.3 (1882.02.01), p.69
(10) “Las obras del Templo de la Sagrada Familia”, *El Pro,* Vol.32, №.6 (1898.03.15), p.142
(11) 鳥居 (2012), pp.4-10

図７・８　サグラダ・ファミリア聖堂、「降誕の正面」を眺めるガウディ、グエイ、トーラス神父（1890年代、ウピスによるスケッチ、カタルーニャ工科大学建築学部「ガウディ記念講座」所蔵）

図 9-11　アレシュ・クラペス:「アトランティダのヘラクラス」(左)、「哲学者バルメス」(中)、「町境の十字架で祈る農夫家族」(右)

ス（1817-83）の長女はイサベル（1850-1924）の名を持ち、その長女もまたイサベル（1872-1956）なのだ。

これら２人のイサベル（エリザベト）が聖母マリアの従妹、洗礼者ヨハネの母の聖エリザベトに由来するのか、それともカトリックの愛徳（博愛慈善）事業の総保護者として知られるハンガリーの聖エリザベト（1207-1231）[12]に由来するのか。いずれにしても、両人とも1890年前後に死んでおらず、イサベル夫人の遺産と直結するとは考え難い。

しかしながら、1894年に出版されたグエイ館の単行本『モノグラフィー、アウゼビ・グエイ・イ・バシガルーピ閣下邸館ミュージアム』[13]

(12) ハンガリー王エンドレ２世の王女。チューリンゲンの領主ルードウィヒの妃。災難を受けた人や貧民の救済に献身。フランシスコ会第三会員として祈りと博愛慈善事業に専念、カトリック博愛事業の総保護者、ポルトガルの聖エリザベトの大叔母にあたる（『キリスト教百科事典』（小林珍雄編）エンデルレ書店 1960、p.246「エリザベト」）

図 12-13　アレシュ・クラペス：「戯れる娘たち」（左）、「ハンガリー王妃聖イサベル」（右）

には注視すべき記述が見られる。この本は地域の遺跡や古建築の発掘・調査研究を目的とする文化団体「カタルーニャ探訪センター」による集団訪問に際し出版されたものであり、この新築の邸宅が歴史建造物並みの扱いを受けたことを意味する。1901年には同じような集団訪問がサグラダ・ファミリア聖堂にも組織されている[14]。ガウディ建築に関する初めてのこの本には、作品の独創性を含む特徴や使用材料などの記述が見られる他、『ミュージアム』と題されているように第2部「宝飾品・芸術作品カタログ」では、各部屋に設置されていた中世の祭壇画や家具のみならず、新作の絵画や彫刻などの解説も見られる。

ここで注目されるのが中央ホールに設けられていた絵画と彫刻である。絵画はアレシュ・クラペス（1846-1920）の5作品。「アトランティダのヘラクレス」（図9）、「哲学者バルマス」（図10）、暗雲垂れこめる「町境の十字架で祈る農夫家族」（図11）および華やかな「戯れる娘たち」（図12）の他、「貧しき民に王冠を授けるハンガリー王妃聖イサベル」（図13）である。グエイの舅であるコミーリャス侯爵家司祭ジャシン・バルダゲー（1845-1902）の叙事詩「アトランティダ」（1877）によれば、ギリシア神話のヘラクレスはスペインとバルセロナの始祖とされ、この英雄がカタルーニャの族長としてのグエイを象徴する。他愛主義を信条とするこの族長は、「近代のキリスト教擁護者」と目されるカタルーニャの大哲学者ジャウマ・バルマス（1810-48）と重ね表わせられ、「祈る農夫」や「貧しき民」を助け、明るい未来の「娘たち」の世界を作り出す。これがグエイの対社会政策であった、とラウエルタは推測する[15]。

このヘラクレスの絵は外壁の壁画として知れているが、1894年の記述に従えば、中央ホールにあったとされる。しかし、その設置場所は定かでない。残りの4作品は現在と同じ4隅のコーナーに描かれていた。祭室向かって右側コーナーの「ハンガリー王妃聖イサベル」（図

(13) Puiggarí (1894)

(14) “Excursions: Visita al Temple de la Sagrada Família”, en *Butlletí del Centre Excursionista de Catalunya,* Any XI, №.74 (Barcelona, març 1901), p.104
Conill (Buenaventura): El Temple de la Sagrada Família, 同上機関紙 , Any XI, №.75 (abril 1901), pp.105-9, 西語再録 *El Pro,* Año 36, n.° 6 (1902.03.15), pp. 82-4

(15) Lahuerta, Juan José: *Antoni Gaudí, arquitectura, ideología y política,* Madrid; Electa España, 1993, pp.96-101

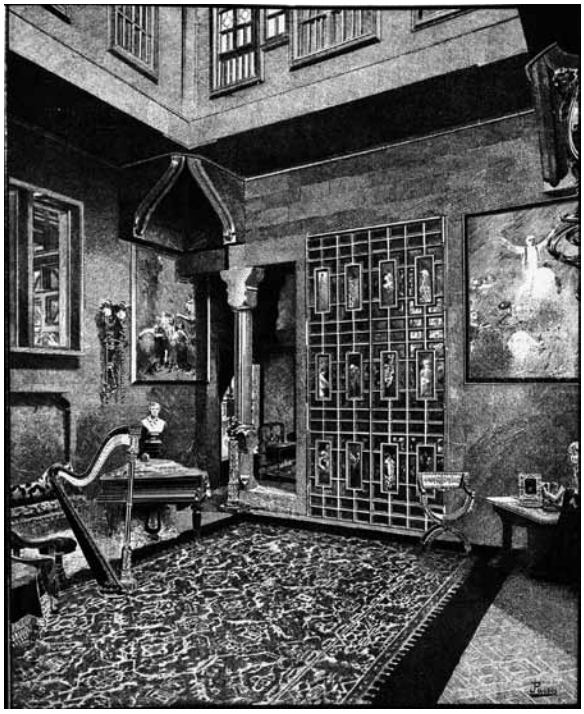

図14-15　グエイ館中央ホール、祭壇左側の絵画：（左）「聖アウゼビ」（1890）、（右）「ハンガリー王妃聖イサベル」（1894年にはこの絵画に取り替えられる、Archivo Mas）

15）は1890年の完成間もない初期の段階では「聖アウゼビ（エウセビウス）」（図14）の民衆に布教する姿が描かれていた[16]。すなわち、最初のアウゼビ・グエイの名前の由来となった聖人から妻の名が由来した「聖イサベル」に変えられたことになる。このことから妻イサベル・ロペスの名前はハンガリー王妃の聖イサベルに由来していたことが判明する。

さらに注目に値するのが同じ中央ホールに設置された大理石胸像であり、次のように記述されている。

「同じ作者による大理石製の素晴らしい胸像：ジュアン・グエイ・イ・ファレー氏とその妻のイサベル夫人；初代コミーリャス侯爵」[17]

彫刻家はルゼン・ノバス（1838-91）、ランブラ・ダ・カタルーニャ通りに設置されたアウゼビの父ジュアン・グエイ（1800-72）のモニュメント（1888）の彫像の作者でもあり、これら３体の胸像は作者最後の作品であろう。この父グエイの胸像が中央ホールの階段中央の大理石台座に鎮座し、このホールを司る。その右下に妻のイサベル夫人の胸像が木製の台座に設置され（図16）、その対面に同じ木製台座の上にアウゼビの舅初代コミーリャス侯爵、アントニオ・ロペス（1817-83）の胸像が置かれていた(図17)。未亡人の初代侯爵夫人ルイザ・ブル

(16) Lupercio Cruz, Carlos Alejandro: *Aleix Clapés (1846-1920) y Mnuel Sayrach (1886-1937) en los márgenes del modernismo* (Tesis doctoral dirigida por Juan José Lahuerta), Barcelona; UPC-ETSAB (Departament de Composició Arquitectónica), pp.175-78 http://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=10&ved=0CEIQFjAJ&url=http%3A%2F%2Fwww.tdx.cat%2Fbitstream%2Fhandle%2F10803%2F129415%2FTCLC1de2.pdf%3Fsequence%3D1&ei=aHGmVMbTO8LTmAXYrYHwCw&usg=AFQjCNHTQbMIik8upnORUBdxAzdY9F1e0w&bvm=bv.82001339,d.dGY（アクセス 2015.01.02）

(17) Puiggari (1894), p.26

図16　グエイ館中央ホール：階段中央台座に父ジュアン・グエイ、その右下に妻「イサベル」、左側コーナーの円柱背後に絵画「戯れる娘たち」（カタルーニャ探訪センター所蔵ネが）

(1830-1905)、アウゼビ本人と妻イサベル、および子供たちの胸像はその他の部屋に設置された。すなわち、中央ホールの胸像はすべて故人たちでグエイ・ロペス家の初代たちであったのだ。

ここで注目すべきは父ジュアン・グエイの妻とされるイサベル夫人の胸像である。この胸像は「ハンガリー王妃聖イサベル」の絵に対しホールの対角線上に位置する。2人のイサベルが中央ホールで対面しているのだ。ところがジュアンにはイサベルという夫人は存在しない。初婚の妻カミラ・バシガルーピ（1824-46）は長男アウゼビの出産が原因して夭逝。妹のフランシスカ・バシガルーピ（1826-53）と再婚するものの、長女ジュゼーファ（1853-74）の出産が同じく難産となり、２人目の夫人も若くして逝去する。しかし、その後の再婚の情報は全く存在しない。妹ジュゼーファはすでに亡き人であったから、ジュアンの妻の胸像としてはアウゼビの母であるカミラ夫人であっても構わないと思われるが、イサベル夫人になっているのだ。誤植とも考えられるが、1894年の前掲単行本の出版費はグエイ自身の負担になったに違いなく、誤植は許されなかったはずである。とすれば、カトリックの愛徳（博愛慈善）事業の総保護者としての聖イサベルを想起させるイサベル夫人の胸像は、アウゼビ・グエイの対社会政策を象徴するものと解釈できよう。

まさにこのイサベル夫人がサグラダ・ファミリア聖堂に遺産を遺した張本人であったに違いない。この虐げられた貧しき人々の聖堂への献金は聖イサベルの心情、すなわちグエイの対社会政策の具現化だと考えられるからである。イサベル夫人の遺産が聖堂機関紙に掲載され始め

図17　グエイ館中央ホール：左側の階段側にジュアン・グエイの妻「イサベル」の胸像、右側に「初代コミーリャス侯爵、アントニオ・ロペス」の胸像、左側コーナーに絵画「哲学者バルマス」（1894年単行本掲載写真Puiggari (1894), p.12bis, Arxiu Mas 所蔵ネガ）

た1891年はグエル館中央ホールの絵が「聖アウゼビ」から「聖イサベル」に取り換えられる時期にも一致する。

1916年の巨額献金

1912年10月号の機関誌で聖堂が赤字財政にあることが初めて公表される[18]。献金を促すキャンペーンが始まったにもかかわらず、財政状態は改善されず、1914年11月、建設委員会は工事の中断を決定する[19]。ガウディは建設委員会のメンバーではない。委員会はオーナー側の経営陣であり、ガウディは委員会から任命された建築家に過ぎないから、建設の続行や中断を決定する立場にはない。それ故、ガウディは中断決定を阻止すべく、1914年1月には次のように委員会に訴えていたのだ。

「これら（建設現場）の職人たちを解雇するならば、後になって、既に建設された部分の修理に労力と資金を費やさなければならないことで作品が被る損害の他、建設再開の折、優秀な職人たちを集めることができないという不都合もある。というのも、われわれの極めて賢明な職人たちを失うことになれば、彼らの代わりに入ってくる職人たちが70mとか、80mとかいう高さで働くことに慣れているとは思えないからだ。また、われわれの職人たちを解雇しない

(18) “Agradeciendo”, *El Pro,* Vol.46, №.20 (1912.10.15), pp.306-07
(19) Martí Matlleu, J.: “El Templo Expiatorio”, *D.deB,* №.324 (1914.11.28), pp.15656-57

としても、材料購入に資金を費やすことができないのであれば、これらの職人たち自身が建設を中断したときの高さで再び工事に戻ったときには、〔久しぶりで不慣れになったことで〕不幸な事故が発生しないとも限らないからでもあるからだ」[20]

しかし、11月に建設中断の決定が下された。その翌月、ガウディはついに覚悟せざるを得ず、他の作品から一切手を引く決断を公言する。それが有名な次の表明であった。

「私には家族もいないし、果たす義務もない。お世話になったクライアント〔顧客〕たちの仕事を手放し、新しい仕事も断った。サグラダ・ファミリアという作品以外には働く気になれないし、聖堂のためでなければ、何一つ望むことはない」[21]

こうしたガウディの表明などもあり、建設委員会は工事中断の決定を白紙に戻した。ガウディが何もしていなかったかというと、そうではなく、1914-15年の冬を中心とした９ヵ月間、見知らぬ家への献金乞の戸別訪問をしていたのだ[22]。1914年は第一次大戦の勃発した年で、経済は最悪の状態にあった。当然ながら、ガウディは面倒な訪問者として冷たくあしらわれ、献金に応じる家はほとんどなかった。ブカベーリャの孫ジュゼップ・マリア・ダ・ダルマッサスはこのガウディの戸別訪問に同伴しており、ガウディの１回忌に合わせ、ある戸別訪問の様子を次のように記す。

「ある日のこと、われわれは大豪商の共同経営者とのアポイントを取った。そのうちの１人はわれわれを待ち受け、手に何も持たずに帰ることなどあろうはずがないと思っていた。しかし、もう１人の方は後者の結果になるだろうと危惧していた。この後者が最初にわれわれと会見したのだが、推測したようにまったく無駄であった。その後、われわれに好意を抱いているはずのもう１人と会見した。こちらは礼儀正しくわれわれの訪問を喜び、若い彼ではなく、年老いて最近は病を患っているガウディ自身が会いに来てくれたことに心を痛めてくれた。ガウディはいつものように目を輝かしながら適切な言葉で彼に語った。しかし、全くの期待外れだった。この友人の若者はガウディの説明一つずつに次のような一言一句変わらない言葉を繰り返すだけだったのだ。『聖堂を高く評価し、ガウディさん、あなたを大変尊敬しています。今日のことは決して忘れません。今は望むこと何一つできないのです。可能になったら、必ず』と」[23]

この会見から１年以上過ぎた1916年のある日、大豪商の従業員が聖堂のガウディに直接封書を手渡しに来た。封書には銀行小切手のみで、他には何もなかった。誰からのものか、使用目的は何か、それらを示す書類は一切なかったのである。これが聖堂建設史上最大の80万ペセタの献金であった。小切手の宛名はガウディで、当然のことながら支払人の署名があった。しかし、ダルマッサスは「小切手にあったサインが誰のものなのか、われわれはそれを伏せるべきであろう。なぜなら、そうすることが献金者の意向であろうことは間違いないからだ」と述べ、名前の公表を避けた。

ガウディは直ちに建設委員会に手渡した。その後、同一人物から同じ方法で、前回より少額の小切手が届いた[24]。これも建設委員会に渡された。しかし、委員会はこれらを「備蓄基金」として銀行に預けて温存し、その利子のみを建

(20) Martí Matlleu, Juan: “La Sagrada Familia”, *D.deB,* №.25 (domingo 1914.01.25, mañana), pp.1164-66 / 鳥居 (2007), p.513
(21) “Boletín religioso”, *D.deB,* №.351 (1914.12.24 mañana), pp.16926-27 / 鳥居 (2007), p.521
(22) Dalmases (1927), pp.221-25 / La mort de Gaudí (2001), pp.194-200
(23) Dalmases (1927), p.225 / La mort de Gaudí (2001), p. 200
(24) Martí Matlleu, Juan: *Carta abierta - ¿ Seguirán las obras del Templo Expiatorio de la Sagrada Familia...?,* Barcelona, 1935.12, pp.11-12

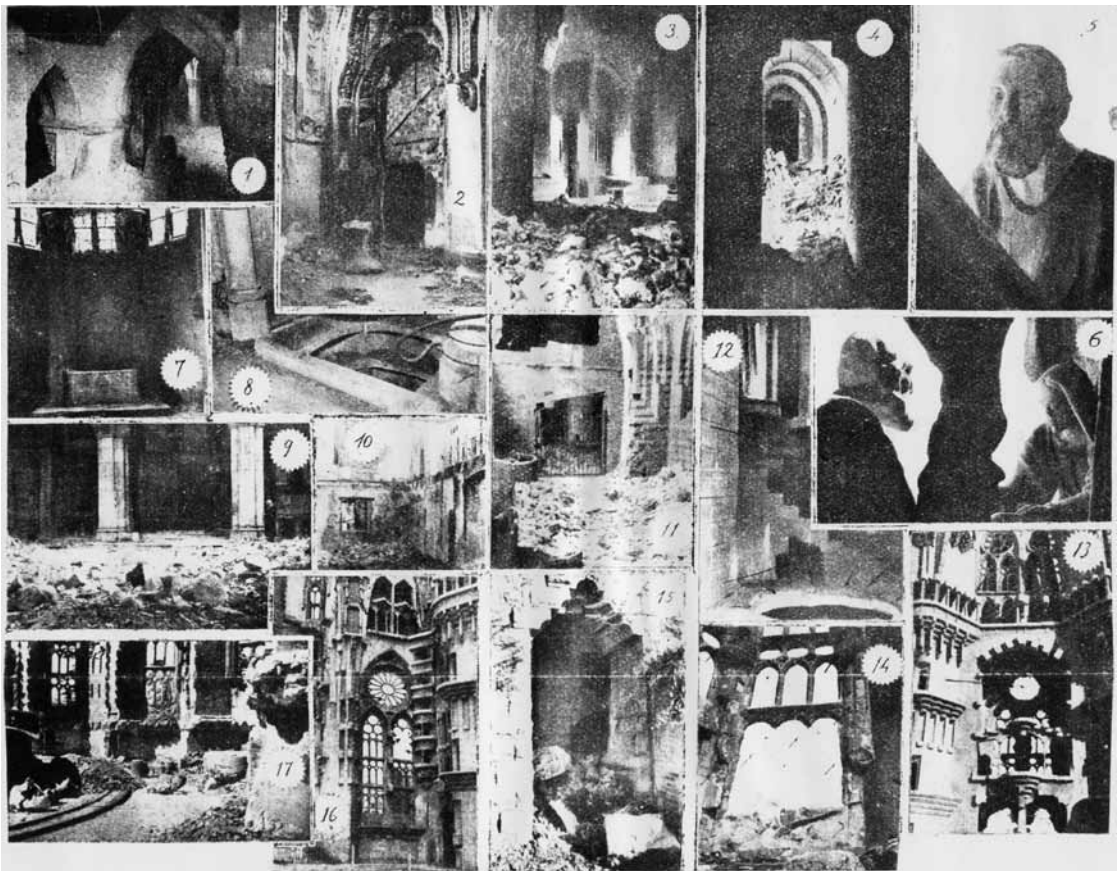

図18　サグラダ・ファミリア聖堂、内戦後の被害状況（1939年1月）

設資金に費やした。次の建設中断危機に備えたのであろう。このマイナス思考の対処法が現在の建設続行を可能にした。なぜなら、スペインの内戦（1936-39）で建設が中断したのみならず、かなりの被害を受けてもいたのだが、国を二分した戦争で国情は最悪の状態にあり、修復可能な経済状況にはなかったからだ（図18）。この修復を含むその後の工事の継続をも可能にしたのが国外の銀行に預けられていた「備蓄基金」の存在であった[25]。これら2つの小切手の総額は130万ペセタに達していたことであろう。

第1次大戦の始まった最初の1年は、戦争による悪影響の恐れから経済は落ち込んだものの、その後のスペインは中立国の恩恵を受けて好景気を迎え、19世紀の借款をすべて返済し、金持ちといわれるほどの国に変身する。例えば、スペイン経済の牽引役のカタルーニャ、その主要産業である織物の輸出量は1914年の5,400トンから翌1915年には3倍以上の17,300トンに急増、1919年までこの右肩上がりのリズムは続いた[26]。前掲した「若い大豪商」の話は当時の経済動向に符合するのである。本稿の最初で指摘したように、献金者の名は今日に至るまで明かされていない。上記引用文でもダルマッサスは名前を伏せるべきと述べている。名前を伏せることが至上命令であったとすれば、誰で

(25) 銀行の所在地を明らかにする文献は現在のところ知られていない。一般常識としてスイスの銀行であろうという情報に触れたことがあるものの、前聖堂建築家ジョルディ・ブネートによると、ロンドンの銀行であったという。

(26) Vicens Vives, J.: *Historia de España y América, social y economía,* Barcelona; Editorial Vicens-Vives, 1974, pp.247-66

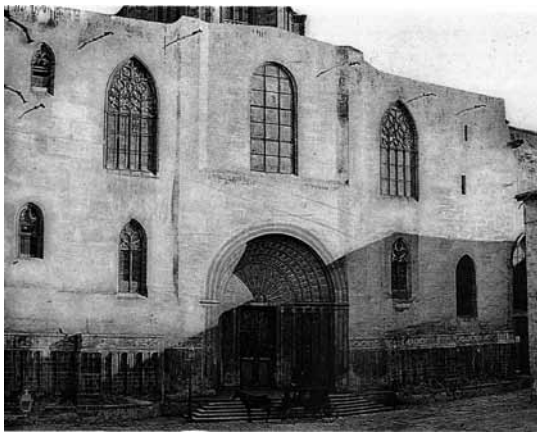

図19　バルセロナ大聖堂、大正面、19世紀の増改築前

あるのかを推測できるような文章であっては不都合であろう。引用した文章の内容から推測されてはならないからである。「若い大豪商」とか、「２人の共同経営者」とかがヒントになってはならない。これらからはガウディより６歳年長の産業資本家アウゼビ・グエイは想像できない。だからこそ、小切手の送り主はグエイであろうと推測される。グエイであるなら箝口令を敷くことが可能であり、現在に至るまで明らかにされていないことも理解されよう。前聖堂建築家のジョルディ・ブネート（1925年生）は6代目同建築家リュイス・ブネート（1893-1993）の息子であり、後者は1914年の建設中断危機に際し、建築学科の学生として献金キャンペーン運動に参加し、ガウディと親しくなった研究者でもある。この息子に問題の献金者が誰であるのか、グエイだろう、と筆者がただしたところ、微笑むだけで答えようとしなかった。このことからもグエイであろうと推測されるのである。

グエイが献金者だとすると、イサベル夫人の遺産を合わせると、約200万ペセタの献金総額に達することになろう。この総額も意味深である。バルセロナには13世紀末に着工されたゴシック大聖堂がある（図19）。しかし、現在の大聖堂大正面は１人の大富豪による献金により19世紀末から20世紀初めに建設された(図20)。その献金者マヌエル・ジローナ（1818-1905）はバルセロナ銀行の創設者であり、「ジローナでも無理」という言葉は、バルセロナでは「不可能」を意味した。大正面は1887年に着工され、正面側採光塔を含め完成するのは1913年である。この全建設費はジローナ家親子の献金のみで賄われ、総額167万ペセタに達した[27]。ジローナ邸はフィンカ・グエイ（グエル邸）の裏手にあり、後者の家屋と両者の敷地の一部が王家に寄贈され、パドラスバス（ペドラルベス）王宮（現陶磁器・装飾・服飾美物館）となっているのだ。大正面の建設年代はイサベル夫人の遺産や1916年の小切手献金の時期にも重なり、両

図20　バルセロナ大聖堂、大正面増改築 1887-1913

(27) 山道佳子、矢嶋由香利、鳥居徳敏、木下亮：『近代都市バルセロナの形成、都市空間・芸術家・パトロン』慶応義塾大学出版会 2009、第四章「カタルーニャ・ムダルニズマ、その建築家たちとパトロンの系譜（ガウディとグエイを中心に）」（拙論）pp.184-88

者の総額も類似する。ジローナ家が公然と献金し、その墓廟を大聖堂内に持ったのに対し、グエイは緘口令を敷き、サグラダ・ファミリア聖堂内に墓所を要請することもなく、献金はひた隠しに隠された。ガウディはこのグエイのことをこう語る。

「アウゼビさんは言葉の持つあらゆる意味で紳士〔セニョール〕であった。あるときこのことを（バルセロナ司教の）カサーニャス枢機卿に申し上げると、われわれが紳士に対しどう理解しているのか尋ねるので、『紳士とは優れた感受性、優れた教育、優れた地位の人のことであり、あらゆる点で優れているから、妬みを感じることも、人の邪魔になることもなく、周囲の人を際立たせることを好む』と言ったことがある。君はこの定義にメディチ家が当てはまるとは思わないかい。枢機卿は納得したがね」[28]

「グエイさんは紳士〔セニョール〕である。なぜなら、金持ちで目立ちたがる人は金持ち以上の人間ではなく、金持ちでそれを見せ付けない人は富をコントロールし掌握できる人であり、それ故、〔グエイさんは〕『セニョール』〔紳士〕である」[29]

「アウゼビ・グエイさんは本当の紳士であり、王侯貴族のような精神の持主であり、フィレンツェのメディチ家やジェノヴァのドーリア家の王侯貴族に似ている。『ドン・アウゼビ』の母君はジェノヴァの高貴で進取な家系の出身で

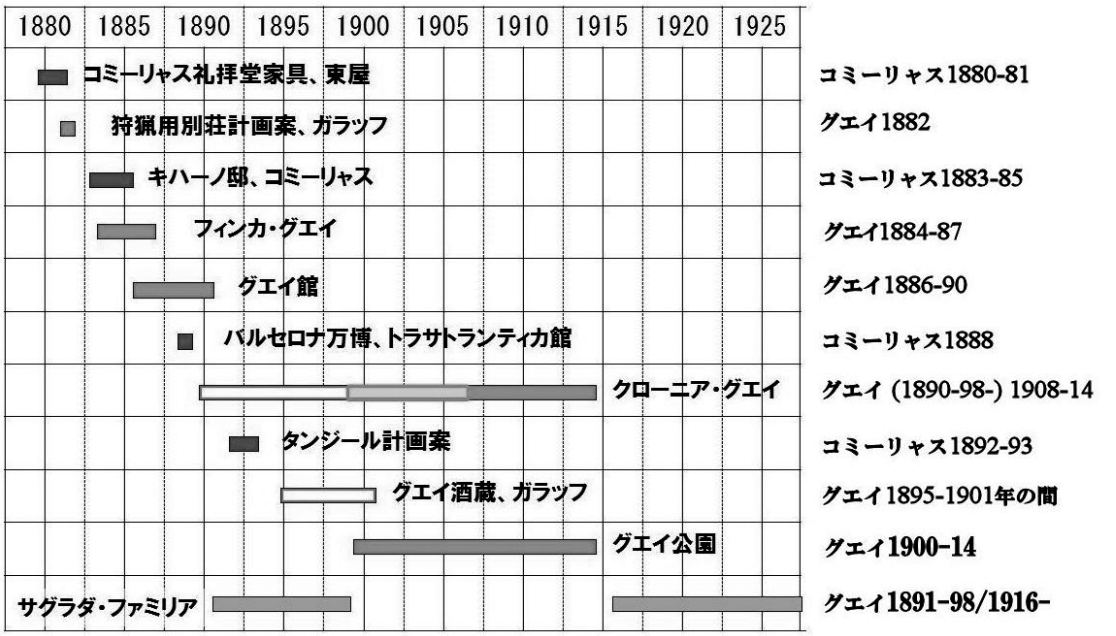

表2　グエイ家（グエイとコミーリャス侯爵家）関連のガウディ作品表：クローニア・グエイは1890年創設、その教会堂は1898年に依頼され、1908年着工、1914年現場からガウディの姿が消えるものの、1916年に建設中断；グエイ酒蔵は1895年から1901年の間に建設される

(28) Martinell i Brunet, Cèsar: *Gaudí i la Sagrada Família comentada per ell mateix,* Barcelona; Aymà, 1951, p.133 / *Conversaciones con Gaudí,* Barcelona; Ediciones Punto Fijo, 1969, p.97 / 鳥居 (2007), p.462

(29) Puig Boada, Isidre: *El pensament de Gaudí, compilació de textos i comentaris per ---,* Barcelona; Col.legi d' Arquitectes de Catalunya, 1981, №.236 / 鳥居（2007), p.598

(30) Bergós Massó, Joan: *Antoni Gaudí, l'home i l'obra,* Barcelona; Ariel, 1954, p.61; 同西語版 , Barcelona; Universidad Politécnica de Barcelona, 1974, p.54 / Puig-1981, p.97 / 鳥居 (2007), p.598

あった」[30]

これらの言葉からもグエイが聖堂への献金を表沙汰にすることを嫌ったことが窺える。

結び

1891年のイサベル夫人の遺産も、1916年の高額小切手も、アウゼビ・グエイのものとするならば、表2に見られるように、グエイはガウディの一生涯を支え続けたことになり、ガウディ建築の誕生にはグエイの存在が極めて重要であったことが再確認される。

イサベル夫人の遺産を工費にあてた1891年から98年は、「降誕の正面」というサグラダ・ファミリアの存在を決定づけるファサードの建設に専念しており、その間の他作品はタンジール計画案を除き、クローニア・グエイもガラッフの酒蔵も助手たちに委ねていた可能性が極めて高い。1914年末からは、他作品から一切退き、専ら聖堂の建設と計画案作成に従事した。クローニア・グエイ教会堂の場合でも1916年まで建設は続行されるものの、ガウディは1915年以降、現場に姿を現していないのである。すなわち、グエイの大口献金のあった時は、聖堂のみに専念していたと言えるのである。

また、グエイのサグラダ・ファミリアへの献金があってこそ、グエイがガウディの全建築家人生をサポートしたことになり、両者の関係が完結する。グエイなくしてガウディ建築の誕生は考えられないのである。

【参考文献】

Dalmases (1927), José María de: “IV Conferencia, «Gaudí captant per temple»”, *El Pro,* Vol.61, №11 (1927.06.1), pp.221-25

D.deB.: *Diario de Barcelona* (Barcelona, 1892-1994)

El Pro: *El Propagador de la Devoción a San José* (Barcelona, 1866-1948)

La mort de Gaudí (2001): *La mort de Gaudí i el seu ressó a la revista «El Propagador de la Devoción a San José»,* Barcelona; Claret, 2001, pp.194-200

Puiggarí (1894), Joseph: *Monografia de la Casa Palau y Museu del Excm. Sr. D. Eusebi Güell y Bacigalupi ab motiu de la visita oficial feta per lo «Centre»,* Barcelona; Centre Excursionista de Catalunya

鳥居 (2007) 徳敏：『建築家ガウディ全語録』中央公論美術出版, 2007

— (2012):「ガウディ研究、マラガイのサグラダ・ファミリア聖堂賛歌」『麒麟』第21号（2012年3月）pp.1-28